

「貨物ハブ機能強化にも重点」

■成田国際空港会社・藤井新社長

20日就任した成田国際空港会社（NAA）の藤井直樹社長が同日会見し、「周辺地域を含めて物流施設の充実度を高めて、貨物便のハブ空港としての機能強化も重要な施策となる」と述べた。藤井新社長は、成田空港の重要な機能としての国際線ネットワークの拡充に取り組むにあたって「航空需要の増加・多様化に的確に対応する」と強調した。田村明比古相談役（前社長）は社長任期を振り返り「成田空港の将来につながる施策、進むべき具体的な道筋をつけることができたと考えている」と説明。「今後は相談役の立場として、成田空港の発展の一助となるべく、会社を支え、藤井社長を支えていく」と語った。

藤井新社長、田村相談役（前社長）の会見要旨は次のとおり。

藤井直樹新社長

▷成田空港のさらなる機能強化、「新しい成田空港」構想を進めてきた田村前社長の功績に敬意を表するとともに、今回、バトンを受けるにあたって特に大事にしたい3点を挙げたい。1点目は「空港と地域の共生・共栄の継続と発展」。開港以来、日本の表玄関口としての役割を担ってきたことは、周辺自治体、地域の皆さまをはじめとする関係者のご理解、ご協力、ご支援があってこそ、と認識している。これまでの歴史の中で醸成されてきた関係者の皆さまとの信頼関係をさらに深めるために、空港と地域の共生・共栄にさらに努力していく。2点目は「安全の確保」。航空輸送で最も重要なことは安全の確保であることは言うまでもない。航空機事故の未然防止はもちろんのこと、台風や地震などの自然災害、コロナ禍のような感染症発生時の対応、サイバーテロ対応など危機管理の徹底が必要だ。備えを万全にすることで、日本の基幹空港である成田空港において安全で安心かつ安定したサービスを提供していく。3点目は航空需要の増加・多様化に的確に対応することだ。日本への訪日外国人旅客数は今年は

4000万人を超える勢いで推移している。半導体や医薬品、eコマース（EC）などの旺盛な輸出入需要に支えられ、成田空港は金額ベースで日本最大の貿易港となっている。国際基幹空港として増加するインバウンド需要、物流需要にしっかりと応えることが必要だ。

▷国際線ネットワークはもちろん、ローコストキャリア（LCC）を中心とした国内線のさらなる拡大を図り、ハブ空港としての利便性を目指す。成田空港は滑走路新設・延伸といったさらなる機能強化に着手するとともに、旅客取扱機能や貨物・物流機能の集約を含む「新しい成田空港」構想を推進してきている。そうした中で、開港以来約50年を経た各施設の老朽化対策、人手不足を乗り越えるための新技術や人材確保策の導入、鉄道をはじめとする空港のアクセス利便性向上など課題は山積している。関係者の皆さまと議論を重ねて「第2の開港」に向けて、なすべきことを見定め、実行していく。

▷成田空港の重要な機能として国際線ネットワークを主眼に据える必要がある。これまですでに旅客数が増加している相手国・地域とともに、新たな国・地域からの訪日需要も想定される。需要が増加している国・地域か



藤井直樹社長

田村明比古相談役

らの路線拡充とともに、これまで需要が多くなかった国・地域についても、今後、新たに路線を開設したいという需要をどのように取り込むか。例えばインドや中東などにもポテンシャルがあり、米国路線もどの程度、寄せることができるか。中期経営計画（2025～27年度）の具現化に向けた方向性も示されている。どのように具体化していくか、しっかり収益を確保して、将来構想に必要な投資についても、しっかりと考えていきたい。

▷日本におけるトランジット需要は、東南アジアと北米間の輸送が柱と認識している。かつては成田空港が圧倒的に強かったが、東アジア・東南アジア諸国・地域の空港など、競争相手が増加して、それら空港の機能が強化されている。人の乗り継ぎに関しては、乗継自体にある程度のストレスがかかるため、快適に過ごす環境をどのように整えることができるか、さらに磨きをかけることが必要だ。人流・

国際物流業界トピックス

物流ともに日本は人手不足の課題を抱えている。人手が十分でなくてもサービスを提供できる体制を整えることも重要だ。物流に関しては「第8貨物ビル」といった最新ターミナルが（自動化・効率化などを）具現化しているが、開港以来の年月を背景に（自動化・効率化などについて）追いついていない部分もある。人流・物流を含めてしっかりサービスを提供できる体制をつくることがトランジッド需要を獲得することにつながる。成田空港は、例えば羽田空港との比較では、発着容量などの観点で貨物便が就航できる優位性がある。周辺地域を含めて物流施設の充実度を高めて、貨物便のハブ空港としての機能強化も重要な施策となる。

田村明比古相談役（前社長）

▷成田空港を日々、安全で安定的に運営するとともに、将来の発展に必要な諸施策を実施する任務を果たすべく、精一杯取り組んできた。関係者の皆さまに厚く御礼申し上げる。20

19年6月の就任時は成田空港の利用者も増加して、収支も好調に推移していた。中長期の発展のために既存施設をフルに活用して利便性、快適性、魅力度を高めるなど価値向上に取り組み始めた。ただ就任直後の夏から秋にかけての台風襲来で陸上輸送網が途絶し、多くのお客さまがターミナルに滞留する事態が発生した。国の最重要施設を運営するものとして、その重み、危機管理のあり方について改めて学ぶことになった。この時の経験を生かすべき機会はすぐに訪れた。世界的なコロナ感染症で世界中の往来が制限された。会社の経営的にも非常に厳しい期間を迎えたが、その間も、移動がどうしても必要な方々の航空便の発着拠点として、また産業物資の貿易港としての役割を果たした。

▷コロナ禍の収束を経て、回復期から再成長への移行段階を迎えている。B滑走路延伸、C滑走路新設といったさらなる機能強化について、地域

の皆さまのご理解をいただきながら各種準備が進み、5月25日に本格着工式を執り行うことができた。旅客ターミナルの再構築、新貨物地区の整備、空港アクセス改善などの将来像を議論して24年7月には「新しい成田空港」構想2.0をとりまとめ、国に報告した。国での検討も開始された。千葉県とNAAによってNRTエリアデザインセンターも立ち上がるなど、成田空港の将来につながる施策、進むべき具体的な道筋をつけることができたと考えている。藤井新社長は、私が最も信頼する後輩であり、人格、知見、能力に優れ、成田空港の課題に多面的に対応する豊富な経験、実績を有している。NAAの舵取りをバトンタッチすることについて大変、心強く感じている。成田空港の発展に向けて強いリーダーシップをもって邁進していただけると認識している。私自身は相談役の立場として、成田空港の発展の一助となるべく、会社を支え、藤井社長を支えていく。